教祖百四十年祭

お道のにをいを届けよう

こかん様にならい、神名を流す女子青年（6月25日）

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

だん〳〵とせかいぢううをしんぢつに
たすけるもよふはかりするぞや　四号
このはなし一寸の事やとをもうなよ
せかい一れつたすけたいから　四号
126　36

布教を表す「にをいがけ」という言葉は、信仰の喜び心やお道の温かい雰囲気、つまり「にをい」を周囲の人々に届けることを言います。日常の態度や姿が無言のうちに良い「にをい」となって、人を惹き付けていく。そこから親神様の御守護のありがたさ、陽気ぐらし世界の素晴らしさを分かってもらい、本当にたすかる道へと導いていきます。

お道のにをいの元は、教祖のひながたにあります。常にひながたを見つめ、自分の心に照らしていく。届かないところは改め、ひながたを辿ろうと努力することが、お道のにをいを身に付けることに繋がります。

世の中には、「助けてほしい」と思いながらも、自らの心の声を上げられない方が大勢おられます。そうした困っている人や悩んでいる人、たすけを求めている人との接点をつくろうと積極的に動くことが、今この旬に求められています。たとえ布教の経験が少なくても、うまくお道のお話ができなくても、身に付けたお道のにをいを醸し出すことはできる。普段の挨拶やちょっとした会話からでも、身近な方にお道のにをいを届けてみましょう。

四方正面

ある教会長さんが手術のため、入院をしていた。入院中は病院食が配膳され、配膳の度に、「いつも美味しい食事をありがとう」と、食事と一緒に付いてくる紙の裏に書いていた。

しばらくして、配膳の係の方がその紙に気付き、それを捨てずに持ち帰って、職場の全員が見やすい場所に貼っていたところ、その言葉に職場の方々が励まされ、後日、責任者が「裏方の励みになりました」と感謝を込めてお礼を言いに来てくれた、という。

皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。

明治30年12月11日

とお教えくださる。ほんの少しの心遣いが人を勇ませ、そしてその勇みが輪となって広がっていく。

年祭活動が始まって半年が過ぎた今、常日頃から人を勇ませる心遣いをしていきたい。（川）

《６月月次祭　挨拶》

おぢばはたすけの拠り所

大教会長　井筒梅夫

皆様方には信仰実践の上に、たすけ一条の道の上にお励みくださいまして、誠にご苦労様でございます。また、ただ今は６月の月次祭を滞りなく共に勇んで勤めさせていただき、大変ありがたい次第です。

６月11日に、関東地区芦津会を開催いたしました。コロナ禍の影響で一旦取りやめていましたが、３年数か月ぶりにようやく再開にこぎつけました。10年前の５月、教祖百三十年祭活動１年目の「全教会一斉巡教」にあたって、関東地区に在住する芦津のようぼく、信者に受講してもらおうとの思いから開催したのがその始まりでした。そうした上から、今回も全教会一斉巡教の一環として開催しました。

当日は、東京教務支庁に、スタッフを含めて46名が集まりました。神殿をお借りして、座りづとめと前半下りを、鳴物を入れて勤め、諭達拝読に続いて、約１時間講話をいたしました。一斉巡教ですから諭達とひながた、そして大教会としての今年の目標である「信仰実践に動く」という観点から、おぢば帰りについて話をいたしました。

今回の開催を皆さん喜んでくださって、その後の懇親会の場で、この秋に次回の開催が決まりました。内容についてもいろいろと意見を聞かせていただきました。

関東地区在住のようぼく、信者の大半は所属教会から離れて暮らしています。芦津という一つの根に繋がるこうした人たちの成人の機会、親睦の場として、今後も関東地区芦津会を継続し、その充実と発展を目指していきたいと考えています。

ところで当日は、何年ぶりかにお会いした懐かしい人たちとの再会の場にもなりまして、大勢の人たちと個々に話し合いをすることができました。中には本人や家族の身上や事情の悩みを聞き、相談に乗ることもありました。切実な悩みを抱えている方も数名おられましたが、そうした人には、まずおぢばへ帰ることを勧め、修養科も勧めました。

私たちお道を信仰するお互いにとって、その拠り所となるおぢばの存在は本当に大きいと思います。私たちには何かあったときに頼ることのできる拠り所があることが実にありがたく、心強い限りであります。

みかぐらうたの四下り目で、

九ツこゝはこのよのごくらくや　わしもはや〳〵まゐりたい
十ドこのたびむねのうち　すみきりましたがありがたい

と、おぢばは親神様の御守護のまにまに、陽気ぐらしの結構をお見せいただく理想の場所だから、お参りをさせていただこうと、おぢば帰りの嬉しさと喜びを歌い上げてくださいます。

また、五下り目では、

七ツなんでもなんぎハさゝぬぞへ　たすけいちじよのこのところ
八ツやまとばかりやないほどに　くに〳〵までへもたすけゆく
九ツこゝはこのよのもとのぢば　めづらしところがあらはれた

と、おぢばから始め出したたすけ一条の道を通ることで難儀不

自由はなくなる。そしておぢばから世界中をたすけにかかるのだと、このおぢばは不思議珍しいたすけの根本の場所であることを教えてくださいます。更に七下り目には、

八ッやしきハかみのでんぢやで　まいたるたねハみなはへる
九ッこゝハこのよのでんぢなら　わしもしつかりたねをまこ
十ドこのたびいちれつに　ようこそたねをまきにきた
たねをまいたるそのかたハ　こえをおかずにつくりとり

と、ぢば・お屋敷は元初まりに人間世界を創られた親神様の田地であるから、蒔いた種は必ず皆生えてくる。しかもおぢばに種を蒔いておけば、肥料を蒔かなくても収穫できるような不思議珍しい御守護に浴することができるから、おぢばにひのきしんの真実を伏せ込んで、結構な天の恵みをいただこうと、ぢばへの信仰実践を促してくださっているのです。

このように陽気ぐらしの御守護を頂くためには、おぢばに足を運び、ひのきしんの真実を伏せ込むことがいかに大切かを親神様から教えていただいています。しかも、おぢばはたすけの拠り所であるとも教えていただくのです。

教会長、ようぼくとして、悩みの相談に乗ったり、病人におさづけを取り次ぐのですが、その際にはぜひ、おぢばへ帰ることを促していただきたいと思います。また、難しいところを何とか御守護いただきたい、もっと成人してもらいたいと願う人には、修養科を勧めていただきたいと思います。おぢばには陽気ぐらしの与えを頂くたすけの理があることを常に心に留めて、お互いおたすけと丹精に勇んで励ませていただきたいと思います。

◇　◇　◇

さて、「こどもおぢばがえり」が4年ぶりに開催されます。コロナ禍で中止が続いたことで、こどもおぢばがえりが縦の伝道の大きな役割を担っていたことが再確認できました。周囲にはこどもおぢばがえりの楽しさを味わったことのない子供たちがずいぶんいるのではないでしょうか。大勢の少年会員に、夏のおぢばの楽しい思い出をつくってもらうのはもちろん、魂に徳をつけていただくためにも、育成会員や子供たちに参加の呼びかけを、重ねてお願いしたいと思います。

来月の月次祭には、本部学生担当委員会・東井申雄（のぶお）委員の来会を頂いて、神殿講話をお務めいただきます。道は末代であることを考えれば、思春期から青年期を迎える世代に信仰を繋ぐことは大切なことであり、またそれは難しいことでもあります。若者にいかにして信仰の喜びを伝えていくのか、というお話を伺います。東井先生は、本部に入る前に約10年間、臨床心理士として大阪大学医学部附属病院で患者さんへのカウンセリング業務についていたという経歴をお持ちですので、そうした方面からの話も聞かせていただけると思います。

教会長さん方をはじめ、この世代の子供さんをお持ちの親御さん、子弟育成の立場にある方には、ぜひ講話をお聞きいただきたいと思いますので、誘い合わせて来月の月次祭にもご参拝くださることをお願いいたしまして、今月の月次祭の挨拶とさせていただきます。

（要約）

《6月月次祭　神殿講話》

「どうでも人をたすけたい」という熱い心で時旬を通ろう

役員　竹内義忠

ひながたを知る

論達に、「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである」と、お示しいただいています。

教祖のひながたを目標に、教えを実践するわけですが、実践する以前の話として、教祖のひながたを知らなければ、実践するにもしようがありません。

ですから、私どもの教会では、少しでもひながたを勉強する上から、朝づとめの際に『稿本天理教教祖伝』を改めて読ませていただいております。毎日拝読していると、新たな気付きや疑問に思うようなことなど、いろいろと勉強させていただけることがあります。

その中で、教祖のひながたの道は、「口に言われん筆に書き尽くせん道を通りてきた」とのお言葉にありますように、一見すると教祖のひながたの道は、陽気ぐらしには程遠い、艱難辛苦の道すがらばかりのように思われます。

教祖のひながたに見られる御苦労を大きく三つに分けますと、一つは、生活上の苦労。一つは、社会からの無理解や、国家権力による苦労。もう一つは、この道を知らない人たちに、如何にしてこの道の御教えを伝え広めることができるのかという苦労だと思います。

その中で、一つ目に挙げました生活の苦労、すなわち、貧に落ちた、ひながたの意味を考えてみたいと思います。

貧に落ち切られたひながた

『教祖伝』に、

月日のやしろとなられた教祖は、親神の思召のまにまに、「貧に落ち切れ。」と、急込まれると共に、嫁入りの時の荷物を初め、食物、着物、金銭に到るまで、次々と、困っている人々に施された。

一列人間を救けたいとの親心から、自ら歩んで救かる道のひながたを示し、物を施して執着を去れば、心に明るさが生れ、心に明るさが生れると、自ら陽気ぐらしへの道が開ける、と教えられた。　（23頁）

と記されています。

施し自体は、月日のやしろとなられる以前にもなされていましたが、それは一定の限度を保ちながらの施し方であって、夫・善兵衛様をはじめご家族も納得し、世間からも賛美されていました。

ところが、天保9年からは一変して、中山家が傾くほどの、常識を超えた施し方をされたことによって、大庄屋まで勤められた中山家は零落してしまい、人々の嘲笑や親族の離反を招く事態になったのです。

しかもその貧に落ち切られた年限は、ひながた50年の約半分以上も費やされているということを考えたときに、今の私たちがそのひながたを辿らせていただこうと思うのであれば、そのことの意味や、正当性を教理的に求めて、理解することが必要になってくるかと思います。そこをあやふやにしてしまうと、教祖が貧に落ち切られた道を、今の日常の中で生かすことは難しいと思います。

ましてや、教祖御在世当時と現代とでは、社会環境や生活レベルなどの点においては余りにも開きがあり過ぎます。そうなると、教祖ひながたの全てが、時代に合わない過去のこととして、教祖の御苦労の足跡を偲ばせていただくことだけになり、辿るというところまでには行き着くことができないのでは、とも思うのです。

お言葉には、
ひながたの道を通らねばひながた要らん。（中略）口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。

明治22年11月7日

と、ひながたを通ることの重要性を教えられています。ただ、50年のひながたを通ることは難しいだろうと、3年と年限を仕切って通ればいいと仰せられています。

心一つでありがたい

さて、教祖とご家族の暮らしぶりについて、『教祖伝』には、

六十の坂を越えられた教祖は、更に酷（きび）しさを加える難儀不自由の中を、おたすけの暇々には、仕立物や糸紡ぎをして、徹夜なさる事も度々あった。月の明るい夜は、

「お月様が、こんなに明るくお照らし下されている。」

と、月の光を頼りに、親子三人で糸を紡がれた。（中略）

こかんが、お母さん、もう、お米はありません。と、言うと、教祖は、

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」

（39～40頁）

と記されています。

灯す明かりがなくても、月の明かりを頼りにして夜でも働けるということの結構さ、水が飲めることのありがたさ。物質的な生活の不自由を通して、親神様からの与えを体感し、どんな状況や境遇になっても、心一つでありがたい、結構と思えることをお教えくださっているのだと思います。

私たちは、健康で元気なときは食べられるのが当たり前、手足が自由に使えるのも当たり前だと思って、感謝の心を薄れさせ、ついには不足心も積もってきます。日常生活にあっても、蛇口をひねると水が出る、スイッチ一つで電気や火が着くのが当たり前という生活に慣れると、感謝の心が薄れてしまうのではないでしょうか。

ところが一度、病気にかかって身体が思うように動かなくなり、また自然災害などに見舞われると、そのことが当たり前ではないということに気付くわけです。

そこで教祖は、かりものの身体や天然自然の恵みを、より感じることのできる道筋として、何不自由のなかった中山家の暮らしを打ち捨て、難儀不自由の道を積極的に歩むことの必要性を、身を以ってお示しくだされたのではないかと思案いたします。

不便や苦労に慣れる

信仰初代の偉大な先人たちは、ない命を助けられ、御教えを学び、代を重ねて積んできた悪いんねんを自覚し、その納消の道を通るため、家業を廃して道一条となられました。そして、「人たすけたら我が身たすかる」という教祖の御教えを信じて、にをいがけ・おたすけに歩かれましたが、その道すがらは、実に容易ならぬ道であったと思います。

郡山初代の平野楢蔵、トラ夫婦の次のような逸話があります。

明治十九年夏、布教のため、家業を廃して谷底を通っている時に、夫婦とも心を定め、「教祖

のことを思えば、我々、三日や五日食べずにいるとも、いとわぬ。」と決心して、夏のことであったので、平野は、単衣一枚に浴衣一枚、妻のトラは、浴衣一枚ぎりになって、おたすけに廻わっていた。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

一八九「夫婦の心」

後世に名を残した布教者たちの白熱した布教の原動力となったのは、正に、貧に落ち切られた教祖の艱難苦労のひながたにあったのだと思います。

ひるがえって今の私たちは、このような、先人たちの道すがらに対して畏敬の念は抱けても、それを自らが通れるかといえば、なかなか難しいように思います。

そう感じてしまう要因の一つとして、今と昔とでは、日常の生活環境が違い過ぎるからだと思います。私の幼少の頃は、トイレは汲み取り式で、お風呂は薪でお湯を沸かし、炊事も薪で炊かれていたことを覚えています。クーラーなどはありません。冬は湯たんぽか豆炭あんかで足を温めて寝ました。

当時はこれが当たり前でしたので、何も不自由とは思いませんでしたが、今その時代に行くと、物凄く不自由を感じると思います。

ですから今の私たちは、不便や苦労に慣れることを心として通れば、ひながたの千分の一なりとも通れるのではないかと思います。教祖は、不便と苦労の道を求めて、勇んでお通りくださいました。その苦労に一貫しているのは、たすけ一条の苦労だと思います。

相手の身になり、低い心で

おさしづに、

元々は難渋でなかったけれども、有る物もやって了うた。難儀不自由からやなけにゃ人の難儀不自由は分からん。

明治23年6月12日

難儀している人たちの心持ちを実感するには、難儀不自由の人たちと同じ目線に立つことが肝要であるとお教えいただきます。

このことは、私たちがおたすけをするにあたっての大切な心構えを教えてくださったと思います。

二下り目の七ツ「**なんじふをすくひあぐれバ**」の「すくひ」の手振りは、自らの腰を落とし、左右の腰辺りから、両手で物をすくい上げるように手を振ります。ここから思案するのは、教祖が人の難渋をすくい上げるときの御態度は、どこまでも相手の身になって、低い心でたすけさせていただくということだと思います。

物を大切にして生かす

この道の初代たちは、我が身、我が家の悪いんねんを白いんねんに切り替えるために、苦労の道を歩まれました。代を重ねて信仰をすることの意味は、自らのいんねんを良くして、さらに次の代の者も、いんねん切り替えの道を続けて歩むところにあると思います。

おさしづに、

さあ〳〵一代は一代の苦労を見よ。長々の苦労であった。二代は二代の苦労を見よ。三代はもう何にも難しい事は無いように成るで。なれど人間はどうもならん。その場の楽しみをして、人間というものはどうもならん。楽しみてどうもならん。その場は通る。なれども何にもこうのう無くしては、どうもならん事に成りてはどうもならん。

明治22年3月21日

先祖の苦労のお蔭で、いんねんが良くなってきているのに、その結構さにあぐらをかいているようではどうにもならないのだと、仰せられています。

人は、便利や贅沢に慣れてしまうと感謝や喜びの心が薄れてしまい、先祖が積んできてくださった徳を減らすことになります。

贅沢の戒めや、物を生かすことなどを諭された逸話は多くあります、その中の一つに、

教祖は、一枚の紙も、反故やからとて粗末になさらず、おひねりの紙なども、丁寧に皺を伸ばして、座布団の下に敷いて、御用にお使いなされた。（中略）

ある時、増井りんが、お側に来て、「お手許のおふでさきを写さして頂きたい。」とお願い

すると、

「紙があるかえ。」

と、お尋ね下されたので、「丹波市へ行て買うて参ります。」

と申し上げたところ、

「そんな事していては遅うなるから、わしが括ってあげよう。」

と、仰せられ、座布団の下から紙を出し、大きい小さいを構わず、墨のつかぬ紙をよりぬき、御自身でお綴じ下されて、

「さあ、わしが読んでやるから、これへお書きよ。」

四五「心の皺を」

という御逸話があります。

私が大教会青年中、おふでさきを畳の上に置いてしまったとき、「おふでさきを直に畳に置いてはいけない」と注意を受けました。それぐらい、おふでさきの取り扱いについては、気を使っておられたと思います。

ですから、増井りん先生が、おふでさきを書き写す紙を買ってきますと言われたのはもっともなことで、座布団の下に敷かれた裏紙に写すと言うようなことは、思いもよらないことだったと思います。

ところが教祖は、そうするように仰った。物を最後の最後まで生かして使うことがいかに重要かをお仕込みされたことが伺えます。

苦労を追い求める日々を

教祖が、「**物は大切にしなされや、生かして使いなされや、全てが神様からのお与え物やで**」と仰せられたお言葉を我が事として、通らせていただく。こうした日々の積み重ねが、教祖のお通りくだされた、ひながたの千分の一、万分の一を辿らせていただくことになると思います。質素・倹約の日々を三年千日と仕切って、日常の暮らしの苦労を追い求めて通らせていただくことによって、微々たるものかもしれませんが、おつくしにも繋がります。

どうか、今申したことをしっかりと心に置かせていただいて、教祖の年祭へ向かって、共々に成人の歩みを進めさせていただきたいと思います。

（要旨）

立教百八十六年　六月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の豊かな御恵みに護られて、恙なき日々をお連れ通り頂き、更には難儀の道中をも親心溢れるお導きによって大難を小難、小難を無難にお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体無い限りでございます。私共は感謝と御礼の心を片時も忘れることなく、今日の時旬の道の御用に勤しませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、奏でる鳴物の音に勇み心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日の日を楽しみに参り集いました芦津の道の子達が、日頃賜る御守護に拝謝し、共にお歌を唱和して、たすけ心一杯に勤める誠の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

今年一年の折り返しの時に当り、この半年を顧みますれば、まだ十分な働きはできてはおりませんが、私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、教祖の御恩は決して忘れてはございません。可愛い子供の成人を促されて、二十五年もの定命を縮めてまで真にたすかる道へと扉をお開き下さいました教祖の親心に、どうでもお応えさせて頂けるよう、御恩報じの精神一つに一同心を合わせ、たすけ一条に勇んで動き働かせて頂きまして、年祭活動一年目をしっかりとつとめ抜かせて頂く決心でございます。

何卒、時旬に尽くす芦津の道の子達の誠真実をお受け取り下さいまして、自由自在の理にお導きを頂き、たすけ一条の御守護と喜びに沸き立つ三年千日をお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしに向かう足取りを、一歩一歩と着実に進ませて頂けますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

関東地区芦津会

6月11日、「第28回関東地区芦津会」が、東京教務支庁を会場に約3年ぶりに開催され、スタッフを含む46名が参加した。年祭活動一年目の本年、全教会を対象に行われた「全教会一斉巡教」の一環として開催された。

はじめに、竹内義忠役員が開講挨拶。その後、座りづとめと前半下りを、鳴物を入れて勤め、参加者は総立ちでてをどりを勤めた。

次に、『諭達第四号』を拝読し、続いて大教会長からお話があった。

大教会長は、教祖年祭の元一日、教祖の親心をもとに、諭達にある教祖の3つのお言葉から教祖のひながたの道を分かりやすくお話くだされた。また、今年の大教会の目標である「信仰実践に動く」という観点から、「折を見て、教祖がお待ちくださるおぢばへ帰っていただきたい」と旬の動きについて奮起を促された。

神殿で記念撮影の後、食堂に場所を移して懇親会。各テーブルではわきあいあいとした雰囲気で情報交換がなされた。また、次回開催やその内容に対して、さまざまな意見が出る中、今秋に開催が決まった。

参加者からは、「久しぶりの開催が嬉しかった」「大教会長様にご来会いただいて、諭達にこもる親の思いを聞かせていただき、年祭活動をさらに勇んで通ろうと思う」との声が聞かれた。

六月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	座りづとめ	大教会長 井筒文夫 守田清一 会長夫人 前会長夫人 榎理恵子
扉者	岩切正教	前半	瀧本眞二郎 河端芳雄 木村真次 岩切孝子 梶川りよ子 松本さだえ
扉者	瀧本庄司	後半	奥田正儀 新居里実 吉田裕樹 竹内淳子 山本広子 中村寿々代
指図方	湯川正圀	てをどり	奥田正徳 川畑澄博 山本義範
賛者	樋川泰士	地方	葭内浩 浜田宣郎 中村俊和
賛者	西本興正	地方	河合善洋 湯川正信 瀧本亘
献饌長	守田清一	笛	加世田洋
伝供	川畑澄博	ちゃんぽん	奥田眞治
伝供	奥田眞治	拍子木	今川政治
伝供	山本義範	太鼓	井筒敏成
伝供	加世田洋	すりがね	岡島秀男
伝供	吉田裕和	小鼓	山田道弘
伝供	河端芳雄	琴	中村美津代
伝供	立花善三	三味線	井筒ちぐさ
伝供	浜田宣郎	胡弓	奥田富美子
伝供	中村俊和		
伝供	石川健郎		
伝供	奥田正儀		
伝供	花岡忠和		
伝供	今川聖一		
伝供	村田光伸		
伝供	湯川正信		
伝供	瀧本一太郎		
伝供	望月慶太		
伝供	梶川芳征		
伝供	宗我道明		
伝供	坂井清人		
伝供	吉田誠		
伝供	田中敏行		
伝供	川畑俊一		
伝供	原田晃雄		
扉者	石川健郎	笛	石川健郎
扉者	立花善文	ちゃんぽん	立花善文
扉者	岩切正義	拍子木	岩切正義
扉者	梶川和隆	太鼓	梶川和隆
扉者	吉田裕和	すりがね	吉田裕和
扉者	立花善三	小鼓	立花善三
扉者	宗我邦代	琴	宗我邦代
扉者	河合遊喜恵	三味線	河合遊喜恵
扉者	吉田幸子	胡弓	吉田幸子
扉者	梶川和人	笛	梶川和人
扉者	榎康紀	ちゃんぽん	榎康紀
扉者	岡本久昭	拍子木	岡本久昭
扉者	梶川芳男	太鼓	梶川芳男
扉者	今川聖一	すりがね	今川聖一
扉者	川畑正博	小鼓	川畑正博
扉者	湯川照代	琴	湯川照代
扉者	山田秀子	三味線	山田秀子
扉者	加世田陽子	胡弓	加世田陽子

あしつファミリーひのきしん

6月24日、育成部（山田道弘部長）は、大教会で「あしつファミリーひのきしん」を開催。大教会の年祭活動の方針の一つである「ひのきしんと伏せ込み」を目的に、親子が揃って大教会に伏せ込む機会として、午前の部には、大人22名、子供13名、午後の部には、大人16名、子供8名が参加した。

午前10時、お願いづとめの座りづとめを参拝した後、揃って大教会南側敷地内の除草ひのきしん。和やかな雰囲気の中、参加者は会話をしながら除草ひのきしんを行った。

昼食に続いて茶話会を楽しんだ後、午後からは館内清掃ひのきしん。信者会館や事務所周りの廊下、階段の雑巾がけを行った。

参加者からは、「家族で大教会を少しでもきれいにできてよかった。家庭でもひのきしんの精神を子供に映していきたい」といった声が聞かれた。

少年会キャンプ

6月25日、少年会芦津団（加世田洋団長）は、さんさいの里で「芦津団キャンプ」を実施。少年会員35名が参加した。今年も昨年と同様、日帰りのデイキャンプとなった。

午前10時より、入所式とオリエンテーション。次に、参加者は各班に分かれて、ボルダリング、トランポリンなど、さんさいの里の設備を使ったゲームや、ラダーゲッター、モルックなどの野外ゲームを楽しんだ。

昼食はバーベキュー。自然の中で食べる食事は格別で、参加者も大いに喜んだ。

午後は焼き板作り。火で焼いた木の板をたわしで削った後、思い思いの絵を木の板に書き込み、この日のお土産とした。

午後4時から、キャンプファイヤーを行い、練習したゲームやキャンプソングを披露し、楽しい時間を過ごした。

最後に加世田団長から「火・水・風の親神様の御守護に感謝し、たすけあいの心でこれからも過ごしてください」と話があった。

参加者からは、「自然の中で普段体験できないことができ、初めて会った子とも仲良くなれ、とても楽しかった。また来年も参加したい」といった声が聞かれた。参加した少年会員たちは、自然に触れて親神様の御守護を直に体感した。

こかん様に続く会

6月25日、芦津女子青年（北村はぎ乃委員長）は親里で「こかん様に続く会」を開催、13名が参加した。

午前10時、詰所大広間で、井筒年子・婦人会芦津支部長からこかん様についてのお話。教祖と共に貧のどん底にありながら、心明るくお通りくだされ、また善兵衛様お出直しの直後、教祖のご指示のままに大阪へ神名を流されたエピソードなどを話された上で、「午後からにをいがけに出ますが、心明るく、勇み心いっぱいで勤めましょう」と激励された。

ねりあいの後、本部神殿へ移動して、おつとめを勤めた。

昼食後は、JR櫟本駅周辺で、3班に分かれて神名流しとリーフレット配布など、にをいがけ実動を行った。

詰所に戻り、全員で一日の振り返りを行った。

参加者からは「みんなの話を聞いて、意見や思いを共有できた。素直な心を持っているなあと感じて、いい刺激をもらえた」「初めてにをいがけを実践してドキドキとワクワクでしたが、他人のたすかりを願い、全力でできた」などの感想が聞かれた。

登用

青年

岡島　藤也
浜田　慶郎

立教186年６月23日

会長室報

世話人変更

靱　山田　道弘
吉野川　岩切　正教
島原　井筒　文夫
日方　竹内　義忠
本津　山田　道弘
姶良　竹内　義忠
門司　岩切　正義
四ツ山　加世田　洋
大冠　岩切　正義
天保山　山田　道弘
青木　山本　義範
芦浪　奥田　眞治
豊野　山本　義範
芦ノ郷　瀧本　庄司
芦明徳　瀧本　庄司
真明彰化　井筒　文夫

立教186年６月23日

教務部報

教養掛主任（４月～６月）

山田　道弘

教養掛

松森　誠太・山下　吉生
望月　慶太・濵本　孝徳
井筒ちぐさ・岩切　治代
岡　摂子

教人登録

松永　謙吾（大関門）
八木はるか（東大屋）

立教186年６月８日

教人資格講習会第131回修了

松永　謙吾（大関門）

立教186年５月11日

おさづけの理拝戴《５月》

田中　和美（周　宝）　〈１名〉

修養科第982期修了

河合　乙音（直　轄）
山本　優子（直　轄）
井内　豊明（徳　修）
八木さくら（東大屋）

立教186年６月27日

初席《５月》

〈１名〉吉野川、今津原
〈順序運びより　２名〉

教会長登殿参列

今年５月26日より、ご本部で教会長登殿参列が始まった。教祖百四十年祭へ向け、全教会長が心定めとともに、更なる決意を固める上から行われている。

芦津は６月から割り当てがあり、16名の教会長が参列。教服に身を包み、結界内で、かぐらづとめ、十二下りてをどりを拝した。

参列者は以下の通り。

岸本　道彦（海　南）
徳村　承治（海部川）
菊池　和彦（大関門）
奥　英昭（芦日真）
梶川　芳征（本　津）
川畑　俊一（南　國）
高崎　裕子（芦　種）
北島　久嗣（津　阪）
前田　貞行（津　雲）
好光　教雄（和　阪）
中原トク子（大　玉）
金田　敬子（名瀬港）
三津井孝道（芦金久）
恵川　恵美（大仲町）
瀧本　亘（天　津）
松森　忠彦（明　道）

出発前、大教会役員からのお話

月例統計（自令和５年１月１日～至令和５年５月31日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	のお理さづけ拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	8		
靱（13）	1			
東津（23）		1	1	
吉野川（29）	2		1	
島原（16）	3	2		1
日方（15）	3			4
稗島（7）	3			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）	1			
門司（6）		2		2
當別（6）				
大島（26）	8		1	
沖縄（3）	1			
尼崎（2）				
四ツ山（5）				
大冠（2）				
島下（1）	1			
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	1			
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	1	1		
勝明（1）				
神の島（1）	1			
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）	2			
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1	1		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）	1			1
本氣（2）	1			
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	40	17	3	8